

コラム

図書館が成長する有機体であり続けるために

- 藤山記念館の変遷を振り返って

ながの ひろえ
長野 裕恵

(日吉メディアセンター課長)

藤山記念日吉図書館（以下、藤山）の思い出について書け、というお題が来た。筆者が日吉の学生だった頃は、藤山記念館は既に図書館ではなかった。依頼する人を間違えているだろう、と思うが、裏事情を明かせば、本誌編集の担当者に「藤山記念館は大規模改装するんですよ。図書館だったころの思い出とか“誰かに”書いてもらったらどうでしょう」などと言ってしまったために、なぜか言い出した自分にお鉢が回ってきてしまったのだ。口は災いの元である。

というわけで残念ながらこのコラムは「思い出話」ではない。日吉図書館から「藤山記念館」になった建物の紆余曲折を頼りに、図書館という場所の役割について考えてみたい。

藤山は、日吉キャンパスの図書館として1958年に開館した。藤山ができるまでの歴史は、『慶應義塾百年史』をはじめ、『三田評論』にもたびたび記事が掲載されているため、ここでは割愛する。ある記事によると、吹抜に階段が配置された全体に明るい建物は学生たちに非常に喜ばれたようだ。実際に多くの学生が閲覧席で勉強したり、新聞を広げたりしている写真が残っている。さらにそれを裏付けるものとして1984年版『塾生案内』の日吉キャンパス紹介には、以下のような一文がある。「第3校舎（筆者注：現塾生会館の場所）と食堂ホールに挟まれた小径が、このキャンパスのなかでいちばんせわしく賑やかな通りであろうか。狭いながら図書館・生協・食堂ホールと第7校舎に通ずる『街の通り』なのだ」。図書館だったころの藤山は日吉キャンパスの中心であった、とも言えよう。

しかし、この時には現・日吉図書館が日吉駅に近い一等地に建設中であった。それから約40年の歳月が経った。残念ながら現在、藤山記念館に向かうこの通りは決して「いちばんせわしく賑やかな通り」とは言えない。

図書館機能移転後の建物について、当時の学生部日吉支部が手を挙げ、学生厚生施設として使うこと

が学内で承認された。初期の案では自主ゼミなどで使用する小会議室、シンポジウムも開催できる大・中会議室、休憩・懇談に使えるラウンジなどが予定されていた。今で言うところの「ラーニングコモンズ」に近い、時代を先取りする学生用空間になるはずであった。しかし、どこかで計画が変わり、2階は事務室と教室になった。常駐の管理者がいたわけではない藤山記念館の開館時間は短く、予約や利用に制約があるなど、自由度は低かったようだ。また、図書館時代を知る先輩に聞くと、階段の上り下りが大変だった、という感想が複数あった。吹抜に階段というモダンな造りは、自由に利用する場としては、逆に避けられる要因になった可能性もある。その後、学生の使い方も問題となり、喫茶店を入れて椅子・机の整頓も含めて委託するなど改善策も導入された。しかし、しばらくして喫茶サービスは終了し、時代の要請もあって一部はPC教室に転用され、残った「自習室」も知る人ぞ知る存在となっていく。

キャンパスの中心であった「図書館の藤山」と「現在の藤山」の違いは何だろう。単に図書の有無だけなのだろうか。前述の藤山記念館改装案を策定する中でコミュニティ政策の専門家にヒアリングした。その際「教室や練習室のように目的が決まっている空間と違い、行動が明確ではない空間には利用者を知って利用者とのハブとなり、自らイベントを行うような仕掛け人が必要」と言われ、はっとした。そうか、図書館には図書館員という「仕掛け人」がいる。図書館も特に理由がなくても滞在でき、一人でもグループでも利用できる「行動が明確ではない」空間と言える。図書館員は、そのなかで利用者や研究環境の変化を見て、空間やサービスを更新してきた。「図書館は成長する有機体である」という言葉がある。ただ建物があるだけでは、徐々に古びて、そして使われなくなってしまふ。図書館が成長する有機体であり続けるために、これからも大学というコミュニティの要請にあわせて変わっていくことが必要であろう。そんなことを考えている。